



TITLE:

レンズ奇譚

AUTHOR(S):

山本

CITATION:

山本. レンズ奇譚. 天界 1941, 21(245): 359-363

ISSUE DATE:

1941-10-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168272>

RIGHT:

レ　ン　ズ　奇　譚

(山　　本　　生)

天文望遠鏡のレンズが割れた、紛失したといふ話しも珍らしいですが、茲にもつと面白い話は、實際に割れたレンズで立派な研究觀測が行はれたといふことがあるのです。今から七十年も前のこと、米國のグルドと言ふ有名な天文學者が、南米アルゼンチン國の政府に依頼されて、彼の國のコルドバに出かけて、南天の寫眞觀測をすることとなり、ニウヨークのルサーフオド博士からレンズを譲り受けました。このレンズはヘンリ・フィツ Henry Fitz, Jr. というレンズ師が作ったもので、直徑は十一吋四分ノ一(二十九糎)でした。グルドが之れを特別貴重品として自己のカバンの中に大切に收め、注意深く運搬したことは言ふまでもありません。ところが、目的地に着いて、カバンを開けて見ると、レンズの片方即ちフリント玉が無慘にも眞二つに割れてゐました。グルドは悲しみました、止むを得ません。そこでいろいろ考へた末、巧みに此の

割れたレンズを並べ直して、星の寫眞をとにかく撮ることに成功し、空のシーイングの検査を進めました。グルドの母が之れを憐れんで、私費を投じて新しくレンズを作らせることにし、そしてフィツとルサーフォードとに注文しました。が、後日、此の新レンズが到着した時、アルゼンチンの政府が其の代金を支拂ふことになり、研究は元の計畫通り首尾よく進捗しました。かのウラノメトリヤ・アルヘンチナといふのは、かうして出来た大事業でした。

フィツといふのは、かのオルヴン・クラーク以前の時代に居たアメリカの優秀なレンズ師でした。彼は独自の研磨法を工夫し改善して、夥しいレンズを作りましたが、其の最盛期にはベン・デュジー Van Duzee 氏のために十六吋とか十八吋（四十何厘）とかいふ當時世界一のレンズを磨いたと言ひます。此の望遠鏡は一八五一年頃、大クレイグ望遠鏡 Great Craig Telescope と名づけられて、バフワロ市に据えつけられましたが、其の後三十年ばかりして取り外されたいふこと以外、どうなつたか、知れてゐませぬ。

フィツは一八六三年にオルバニ市のダドリ天文臺のために十三吋(三十三糎)の望遠鏡を作りましたが、十五年ばかりして、之れは何故か駄目になつたと聞いてゐます。彼は更に今一つの十三吋玉をアレゲニ市の「紳士協會」Gentlemen's Association のために作りまして、其れは一八六一年の初めに据え付けられました。次にフィツは又第三番目の十三吋玉を一八六八年(日本の明治元年)に作りました。此れには珍らしく寫眞裝置のために徑十三吋の修正レンズが附屬してゐました。そして、焦點距離は眼視的には五米、寫眞的には四米でしたから、撮影の時には下部を取り外すことになつてゐました。此の望遠鏡は一八八三年にコロンビヤ大學に移されて、ルサーフオド博士に愛用せられ、最近にも之れはル博士の後繼者によつて、恒星の寫眞撮影に用ひられました。

フィツのレンズのうち、最も奇怪な履歴を有つてゐるのは、一八六〇年にアレゲニ望遠鏡協會 Allegheny Telescope Association が買収したものです。之れは今のピツバーク市の北區 North City で、即ち現今のフエカ光學製造所の附近に出來たアレゲニ天文臺に据え付けられ、附近の或る學校の教師であつたフィロー

タス・ディーン Philotus Dean といふ人が臺長となりました。ところが、間もなく此のディーン臺長は精神異常を來し、『こんな立派な器械は使つてはならない』と言つて、どこかへ片付けて了ひ、『このレンズは誰かに盗まれる』といふ豫言めいた詩を作つたり、其の他、いろいろ變なことがありましたので遂には免職となり、天文臺は一八六七年にペンシルゼニヤ西部大學 Western University of Pennsylvania(今のピッツバーグ大學)に移され、まもなく、ラングリ S.P. Langley が臺長となつて、大に業績を擧げました。

ところが、不思議なことに、一八七二年(明治五年)七月八日の夜、かのディーン臺長の詩の豫言が適中して、望遠鏡のレンズは何者かに盗られました。そこで、一時、ディーンに嫌疑がかけられました。しかし、この嫌疑は間もなく晴れました。けれど、元々このディーンが『レンズはすばらしい逸品である』といふ評判を立てそれによつて、泥棒の悪心を誘惑した意味に於いて、間接ながら、この事件の責任者であつたには違ひありません。——さて、このレンズの盜難事件は、大に世間を騒がしたあげく、之れを天文臺に取り戻すために贖償金を支拂ふことにしたら宜からうといふ聲さへ聞こえました。(こんな所

は、いかにもアメリカ式です。この贖償金は、大した金額ではなかつたのですが、しかし『悪い先例を残しては國內の諸所にある天文臺の大レンズが皆同様な災難に遭ふことにもなろう』と言つて、ラングリ臺長は之れを支拂ふことを拒絶しました。其の後、よほど日が経つて、ラングリ臺長はレンズを盗んだ人間に遭ふことが出来、談合の結果、その盗人の名は公表しないといふ堅い約束の下に、レンズは安全に天文臺へ歸りました。

レンズを検査したところ、豫期したほどの損害も無く、只、その表面に幾つかの搔き痕がありましたので、一八七三年にオルヴン・クラークによつて研磨整形がやり直されました。搔き痕の若干は余りに深過ぎて、磨り消すことが出来なかつたため、今でも、詳しく見ればそれが分ります。とにかく、かうしてレンズは元の望遠鏡に収まり、鏡筒は元々木製であつたものが鐵に代へられ、現在、新アレゲニ天文臺に於いて、毎週幾晩か、やつて来る參觀人たちのために、ダニエル氏が主任となつて、公開してゐます。このレンズを通して見るに、星像は實に立派で、些かの缺點も見つかりません。